

ART から CULTURE へ (その1) — 学としての Folklore 成立の背景を探る —

伊藤忠夫*

はじめに

1. 言語 = art, 言語 = culture の具体例
言語 = art の例 言語 = culture の例 現代英語における art の意味
2. 18世紀における art の意味
ジョンソンの『辞典』での説明 ハリスの『ヘルメス』における定義的説明
モンボドの『言語の起源と進歩について』における説明
3. art という語の英語における歩み — 主として OED による
art の項目全体の構成 18世紀において中心的だった意味の記述
重要な指摘, 二つ 現代の意味とそれに関する指摘 science と nature の関
連項目を見る 18世紀における art を中心とした主要概念・用語の整理 — art
を中心とした諸概念関連図 その1
4. 18世紀における人間・社会把握の理論的枠組みの中での art の位置
「人類史」という構想 art の位置付け
art を中心とした諸概念関連図 その2
5. 18世紀における諸概念の関連を揺るがせる動き
新しいアプローチによる自然諸科学の成立 生産現場での変化 抽象的概
念・抽象語における動き art を中心とした諸概念関連図 その3
6. 「art = 美術・芸術」への流れ (以上本号)
美術「アカデミー」「協会」の成立と名称 fine arts という表現
ジョン・ラスキンの用例
7. 19世紀後半における art という語の意味
art は nature と対比される 『ブリタニカ百科事典』第9版の art の定義:
art は science と対比される; 社会の進歩の中で実際的必要から様々な art が生み
出されてきた; もう一つ別種の arts が存在する — 喜び・楽しみのための art;
「art = 美術」の拡大と共に manufactures との対比が生まれた
8. art の概念的特徴

*中京大学教養部教授

9. 「何か明確な語」を求める意識

ニューマンは「何か明確な語」を求める — 19世紀半ば

アーノルドは、culture という語を押し出す

アーノルド的 culture の特徴とそれに対する反応

「何か明確な語」を求める別の底流 — 人類学・民族学的視野の拡大

エドワード・タイラーが culture を定義する

10. 「意図されざる社会的結果」の発見 — 相対的に自律した存在としての社会

18世紀西欧の「腐敗墮落論争」 「意図されざる社会的結果」

社会の相対的自律性の承認 — 「意図されざる社会的結果」が含意するもの

11. 19世紀言語学における言語の相対的自律性の確認、そしてタイラー

デルブリュック『言語研究入門』(1880)に見る19世紀言語学の特徴

タイラーの理論と比較言語学の並行性

12. art と culture の対比

対比図 言語学の修辞学との絶縁 「体系」意識の転換

13. 「何か明確な語」がなぜ culture になったのか

一つのエピソード なぜ culture なのか ソシユールの「連合関係」

どのような語が浮かんでくるか culture が選ばれた理由

14. folklore 成立とその性格をめぐって

folklore という語の成立 世界最初の「フォーク・ロア協会」の設立

folklore は art と culture 双方を踏まえなければならない

おわりに

はじめに

18世紀イギリスの言語研究書を読んでいて、「言語＝art」という捉え方であることを知った。このartは、「芸術」と考えると、狭すぎる。狭すぎるというだけではなくて、むしろ誤りと言って良い。

一方現代では、「言語＝culture・文化（の一部）」と捉えられている。

すると、この200年の間に、もっと絞れば大体19世紀の後半から20世紀の前半にかけて、artからcultureへの転換があったと考えられる。

筆者は言語学を専攻し、英語史に特に関心をもっているのであるが、「artからcultureへ」というテーマを追究しようと考えた直接のきっかけは、このようなイギリス、ヨーロッパにおける言語観の変化の根底に何があるのかを探り出したいということであった。

言語学は、社会・人文諸科学において水先案内の学問であると言われることがある。つまり、他の諸科学に先んじて新しい視点や方法がまず言語学に現われ、やがて他の分野へと広がっていくという流れが見られることを言っている。例えば、ソシユール理論、構造主義、チョムスキー理論と並べてみると、少なくとも現象的にはその見方が成り立つことを納得させられるだろう。しかし、言語学史と題されている本を読んでみても、なぜ言語学がそのような役割を担うことになったのかについては、ほとんど触れられていないのが実情である。

本稿では、「art から culture へ」の転換が、言語学史的に見て重要であるだけでなく、他のさまざまな学問にとってもその成立の基盤に関わっているし、学としての folklore 成立にも直接的に関係しているだけでなく、学問としての基本的性格を捉えるのに有益であることを指摘しようと思う。

1. 言語＝art, 言語＝culture の具体例

(1) 言語＝art の例

1762年の例。

「言語は、話されたものにせよ書かれたものにせよ、一つの Art (技能) と呼ぶのが適切である。…… 文法は、この技能 this art の規則と用いる際の指示を含んでいる本である。」

LANGUAGE, whether spoken or written, is properly termed an *Art*. ... GRAMMARS are books that contain the rules and precepts of this art.

ジョセフ・プリーストリ Joseph Priestley (1733-1804) [牧師, 化学者, 酸素の発見者] の『言語の理論と普遍文法に関する講義』*A Course on the Theory of Language and Universal Grammar* (1762) の冒頭の部分である。

(2) 言語＝culture (文化) の例

1978年の例。

「このように考えてくると、人間が作り出した象徴体系のうちで、言語の持つ重要性が認められたと思われるが、言語と文化という観点からみると、この問題は大きくわけて、二つの側面があると思われる。一つは、人間が高度に発達した生活をしてゆくために不可欠な伝達手段として作り出した道具という側面、すなわち、文化の一要素としての言語という面であり、もうひとつは、他の文化を象徴的にあらわすものとしての言語、すなわち、言語としての文化という側面である。」 [強調は、引用者]

石川 栄吉編『現代文化人類学』(1978, 弘文堂) の第5章「言語と文化」(唐須教光執筆) 205頁。

(3) 現代英語における art の意味

『ロングマン現代英語辞典』*Longman Dictionary of Contemporary English* (1978) では、次の

四つの項目に分けて、記述されている。

1. 美しいものや真実のものを作ること、あるいはその表現、特に目で見えるような形で、例、
絵画。
2. そのようにして生み出されたもの（特に「芸術作品」という句で）。
3. そのような制作や表現、または何かを作ったり、行なったりする際の優れた技巧。
4. 何かを行なう、特に難しいことを行なう巧みな方法。
 - 1 the making or expression of what is beautiful or true, esp. in a manner that can be seen, as in a painting.
 - 2 things produced in this way (esp. in the phr. **work of art**).
 - 3 fine skill in such making or expression, or in the making or doing of anything.
 - 4 a skilful method of doing something, esp. something difficult.

現代では、「芸術（作品）」という意味が、まず思い浮かべられるようになっていることが分かる。そういう事情は、英語に限られない。例えば、学習用の『クラウン仏和辞典』では、**art** ① 芸術、② ≪複数≫ 美術、③ (a) 技術、術、(b) ~ **s libéraux** 自由科目、教養学科、リベラル・アーツ、④ (a) l' ~ **de + inf.** ... する術 [こつ]、(b) 巧妙、技巧、⑤ ≪文≫ 人為、人工（自然に対して）となっている。

ついでに、同じ『ロングマン現代英語辞典』で **culture** を見ると、次の五項目に分けられている。文化人類学で言う「文化」は、第3項目になる。

1. 精神の芸術的および他の活動とそれによって生み出された作品。
2. 社会のなかに存在し、その構成員においてさまざまな水準で表れている芸術と思想の高度に発達した状態。
3. ある社会の芸術、思想、慣習の特定の体系。特定の時期にある民族によって作り出された芸術、慣習、信念およびあらゆる他の人間的思考の産物。
4. 教育や訓練による精神や身体の発達と向上。
5. 動物の飼育と植物や穀物栽培の実践。
 - 1 artistic and other activity of the mind and the works produced by this.
 - 2 state of high development in art and thought existing in a society and represented at various levels in its members.
 - 3 the particular system of art, thought, and customs of a society; the arts, customs, beliefs, and all the other products of human thought made by a people at a particular time.
 - 4 development and improvement of the mind or body by education or training.
 - 5 the practice of raising animals and growing plants or crops.

以上のような現代の意味を押さえた上で、2世紀をさかのぼって18世紀における **art** の意味を

詳しく検討することにしよう。

2. 18世紀における art の意味

(1) ジョンソンの『辞典』(1755)での説明

18世紀の英語における意味を知るのに最も手っ取り早く、有り難い文献であるサミュエル・ジョンソン Samuel Johnson (1709-94) の『辞典』では、次の六項目があげられている。

1. 自然と本能によって教えられず何かをする力, 例, 「歩くこと」は自然により, 「踊ること」は一つの「技能」。
2. 一つの科学, 例, リベラル・アーツ。
3. (主として手を使う) 職業。
4. 技巧的なこと, 技巧, 器用さ。
5. 熟練。
6. 思弁。

1. The power of doing something not taught by nature and instinct ; as, to *walk* is natural, to *dance* is an *art*.
2. A Science ; as, the liberal *arts*.
3. A trade.
4. Artfulness ; skill ; dexterity.
5. Cunning.
6. Speculation.

上の記述で特に注意を引き付けられる項目は, 2. の「科学」である。現在では, 「科学」は, art「芸術」とは非常に遠いところにあるのが普通である。そこで, 対照してみると, art という語の理解を深めることが出来ると考えられるので, ジョンソンの辞典の science も引いて見よう。

1. 知識。
2. 論証に基礎をもつ確実性。
3. 前以て与えられた指示によって得られた, または, 原理の上になてられた技能。
4. 知識の, 何らかの技能または種類。
5. 七つの自由科目, 即ち文法, 修辞学, 論理学, 算術, 音楽, 幾何学, 天文学, の一つ。
 1. knowledge.
 2. Certainty grounded on demonstration.
 3. Art attained by precepts, or built on principles.
 4. Any art or species of knowledge.
 5. One of the seven liberal arts, grammar, rhetorick, logick, arithmetick, musick, geometry, astronomy.

二つの語の記述を比較すると, art の 2, science の 5 のように全く重なる場合もあって非常に興味あり, また, 重要であるが, 違いに重点をおいて見ると, 次のようなことが言えそうである。

artについては、項目 1, 3, 4, 5 から見て、実地の経験との結びつきに傾いていること、scienceについては、全体として、知的、理論的性格が前面に出ており、まだ「科学＝実験」という結びつきが一般大衆の意識にまで根をおろすに至っていないことを考慮すると、実地の経験から離れた、抽象性を特徴としていたと考えられる。

art は低級、science は高級、という連想があったと思われる。

→ art についてのまとめ（第 1 段階）

art は、人間の本能的なものではなく、実地の経験によって獲得された腕前、巧みさを包括的に表し、そこから、理由はわからなくても、こうすればこうなるという経験的知識を指すのが、中心的意味であった。同時に、学問、科学をも指す場合があり、広い概念であったと言える。

☆『ブリタニカ百科事典』初版（1768-71）の説明

18世紀における art と science の違いについては、このような単語の意味の解説も記載していた『ブリタニカ百科事典』*Encyclopaedia Britannica* 初版の記述が、その特徴をよく伝えてくれる。いずれも説明の全文である。

技能「一定の諸行動の実行を容易にするのに役立つ規則の体系。」

ART, a system of rules serving to facilitate the performance of certain actions.

科学「哲学 [学問的領域] では、規則に従った論証によって、自明で確実な諸原理から推論された何らかの教義を指す。」

SCIENCE, in philosophy, denotes any doctrine, deduced from self-evident and certain principles, by a regular demonstration.

(2) ハリスの『ヘルメス』（1751）における定義的説明

ジョンソンが辞典編纂に携わっていた1751年に、ジェイムズ・ハリス James Harris (1709-1780) が『ヘルメス、言語と普遍文法に関する哲学的探求』*Hermes: or a Philosophical Inquiry Concerning Language and Universal Grammar* という本をだした。

その本のなかで、ハリスは、art と science について次のような説明をしている。

「私は、あらゆる種類の対象・領域におけるすべての正当な実践は「経験」に基礎を置いていると考える。そして経験とは、多くの繰り返された「実験」の結果に他ならない。しかし、それに付け加えて言わなければならないのは、経験だけに基づいて行動する人は、どんなにうまくやっても、やぶ医者、もぐりの医者にすぎないし、そのことは、医学だけでなく、あらゆる他の領域においても同じだ、ということである。そこでわれわれが「技能」を認め、やぶ医者がその名前を捨てて、もっと名誉ある「技能者」の名前を得るのは、彼の「経験」に「科学」を付け加え、それによって、「何が」なされるべきかだけでなく、「何故」それがなされるべきかを、われわれに語れるようになる時のみである。というのは、「技能」は、経験と科学の合成体であり、経験がその素材を提供し、科学が素材に形式・形相を与えるのだからである。」

I hold all justifiable Practice in every kind of Subject to be founded in EXPERIENCE, which is no more than the result of many repeated EXPERIMENTS. But I must add withal, that the man who acts from Experience alone, tho' he act ever so well, is but a Empiric or Quack, and that not only in Medicine, but in every other Subject. 'Tis then only that we recognize ART, and that the EMPIRIC quits his name for the more honourable one of ARTIST, when to his EXPERIENCE he adds SCIENCE, and is thence enabled to tell us, not only, WHAT is to be done, but WHY 'tis to be done; for ART is a composite of Experience and Science, Experience providing it Materials, and Science giving them a FORM.

(同書, 352-3頁)

ハリスは、上の文章に続けて、「実践的知恵」PRACTICAL WISDOMには実験が不可欠であるが、「純粹で思弁的な科学」PURE and SPECULATIVE SCIENCEにとっては全く関係ない、と言っている。

ハリスにおける「経験」は、現在の「経験」の通常の意味と殆ど違いはないといえるだろう。「実験」でも現在の意味とあまり大きい隔たりはないと思われるが、経験との語源的共通性（どちらも、ラテン語 experior「試す、試みる、企てる」から来ている）と関連させて、より日常的な「試し、試み」に近く捉えられていると言える。「科学」は、「実験」が日常的な経験に近いものとして理解されている分だけ、逆に、純理論的、思弁的性格がつよく意識されることになり、その点では、現代の意味とかなり違っていると考えられる。更に現代との違いが大きいのは、「技能」artである。「技能者」artistも同様で、これを芸術家、画家と捉えると、殆ど理解不可能になる。

→ art についてのまとめ (第2段階)

art は、経験・実験から生まれてくるものである。しかし、経験・実験と無関係な抽象的、原理的思索の成果である科学に支えられていなければ、真の art とは言えないし、経験に従うだけでは、artist にはなれない。

ハリスの説明で、art が実践、経験、実験と結びついていることが一層明確になり、science との対比も鮮明になった。ハリスは、一方に経験・実験を置き、他方に科学を置いて、art はその両者に支えられている、彼の言い方では、両者の「合成体」とあるという構図を抱いていた。そして、彼は、科学重視（＝理論、原理重視）の方に傾いていた。

しかし、ここで問題が生ずる。対比を鮮明にすることに力が注がれた結果、一方で、ハリスにおける art は、概念的に狭められてしまった。science に基づかない art が締め出されてしまったからである。経験・実験と art との中間領域をどう捉えるのかという問題が出てくるだろう。他方では、狭められた art と science の両者を包括的にとらえる概念の不在を指摘できるだろう。

その点に関連しては、art の概念を検討し、徹底して広く捉えた思想家がいたので、次に取り上げよう。

☆『百科全書』(1751-80)における「技術」と「科学」の区別

なお、フランスの有名な『百科全書』(岩波文庫に部分訳あり)の中のディドロの執筆とされる「技術」artの項目での記述は、ハリスのartとscienceの区別とほぼ一致する。

「科学と技術の起源 科学や技術を生み出したものは、その必要性のためとか、その奢侈のためとか、その娯楽のためとか、あるいはその好奇心のために、自然の産み出したものにもっぱら注がれた人間の精励である。そしてわれわれのさまざまな熟考反省のこれらの集積点は、論理学者のいう意味でのその形式的対象の本性にしがたって、科学とか技術とかの名で呼ばれることとなった。《対象》の項参照。対象が実際に作製される場合、それを作製するにあたって手引きとなる諸法則の、集合や技巧上の手筈は技術と呼ばれる。対象が単にさまざまな面から熟視されるだけならば、この対象にかかわる観察の結果の集合と技巧上の手筈は科学と呼ばれる。かくして形而上学は科学であり、道徳は技術である。神学と花火製造術についても同様である。」(岩波文庫、295-6頁)

(3) モンボドの『言語の起源と進歩について』(1773-1792)における説明

ハリスに思想的に共鳴し、本人の言い方によれば、ハリスの『ヘルメス』の続編であるという『言語の起源と進歩について』*Of the Origin and Progress of Language*を書いたモンボド卿 Lord Monboddo、ジェイムズ・バーネット James Burnett (1714-99)は、概念的にはるかに詳しい展開を行なっている。

① artは、「獲得された習慣」acquired habitである

モンボドは、言語を検討する際に最初に考えるべきことについて、次のように言う。

「この問題において最初に考えられるべきことは、言語は一体「技能」の、言い換えれば、「獲得された習慣」の作り出したものであるのかどうか、である。」

The first thing to be considered in this matter is, whether language be at all a work of art, or acquired habit? (同書、第I巻、9頁)

モンボドがなぜ「獲得された」習慣という考えを最初に提出するかというと、彼は、言語が人間にとって自然的なもの、本能的なものではない、ということを強調したいからである。

② artは、本能と対立的なものである

「本能とartの間の大きい違いの一つは、こういうことである。本能によってなされることは、最初にも、最後にも同じようにうまくなされる。それに対し、artは、どうしても、徐々になされる進歩によって形成されるのである。」

... one of the great differences betwixt instinct and art is, that what is done by instinct is performed as well at first as at last; whereas art is necessarily formed by gradual improvements. (第I巻、301頁)

「artと本能の間のこれらの違いをまとめると、こういうことになるだろう。本能はそれがかかげる目的に向かって直線的に進むか、余り迂回しない。それに対し、artは、回り道をし、

物事の性質を調べたり、観念を比較したり、前提から帰結を引き出したりして、その活動を行なう。」

The sum of these differences betwixt art and instinct seems to amount to this, that instinct goes directly to the end it proposes, or does not go far about ; whereas art takes a round, and performs its operations by studying the nature of things, comparing ideas, and drawing consequences from premisses ;
(第 I 卷, 273頁)

このように、獲得された習慣 = art と本能を対立的にとらえるが、これは、あらゆる存在を、art の領域のものと自然の領域のものに二分するという、彼の基本的考えと直接に結びついている。

③ art は、nature と対照区別される

art の領域と自然の領域との二分について、彼は次のように言う。

重要なので、長い引用になるが、紹介しておこう。

「人間の知識のすべての対象は、いかに数多く多様であっても、自然の作品と、我々の能力で把握できる限りでの自然の偉大な造り主自身であるか、または、技能の作品であるかのどちらかである。自然の造り主は、もちろん人間精神の熟考の最高の対象である。そして、自然の作品も同様に神の知恵の産物であるから、技能の作品よりも遥かに崇高で優れている。それに対して、技能の作品は、人間知性によって生み出されたもので、神の知恵を真似て作り、その模範に基づいて一種の創造物を形成する。というのは、その創造の素材が自然によって与えられるだけではなく、我々が秩序、規則性、美、結構の均斉について抱くあらゆる観念は、すべて神による創造の偉大な原型から得られているからである。このようにして、人間は、自分自身の小さな世界を形作るが、その世界では人間が至上権者であり、また、その世界は、「自然」の偉大な世界と対照区別して「技能」の世界と呼んでいいだろう。」

All the subjects of human knowledge, how many and various soever, are either the works of nature, and the great author of nature himself, so far as he can be comprehended by our faculties, or the works of art. The author of nature is undoubtedly the highest subject of the contemplation of the human mind ; and the works of nature are likewise far more noble and excellent than the works of art, being the production of divine wisdom ; whereas the other are produced by human intelligence, working in imitation of divine wisdom, and upon that model forming a kind of new creation : for not only are the materials of this creation furnished by nature, but every idea which we have of order, regularity, beauty, and symmetry of design, are all taken from the great archetype of divine creation. In this way does man form a little world of his own, of which he is the sovereign, and which may be called the world of Art, in contradistinction to the great world of Nature. (第 II 卷, 1-2頁)

④ art の特性

モンボドは、以上の説明以外に色々なところで、art がもっている特性について述べている。気付いた点を整理してあげてみる。

(a) 計画, 体系をもつ

「あらゆる art に絶対的に要求されることが一つある。それは、計画, 体系をもたなければならぬということである。そうやって私が何を言おうとしているのかというと, art は、達成されるべき何らかの目的をかかげること, そして、その目的の達成のために、一定の方法により、一定の規則に従って進まなければならない、ということである。」

... there is one thing absolutely required in every art, that it should have some plan or system ; by which I mean, that it should propose some end to be attained, and proceed in a certain method, and according to certain rules, for the attainment of that end.

(第Ⅱ巻, 487-8頁)

(b) 実践に不変性, 安定性を与える

「art のみが、実践にある種の不変性, 安定性を与える。実践は、その art が考えだされるまでは、さまざまで予知できないものであるに違いない。」

it is art only that gives any constancy or stability to practice ; which, till the art is invented, must be various and capricious.

(第Ⅰ巻, 327頁)

(c) 多様性と美しさをもつ

「どんな art においても、多様性がなければ美しさは有り得ない。(というのは、art は、一つの体系であり、秩序と規則性だけでなく、多様性がなければ、どんな体系も存在し得ないからである。)」

there can be no beauty in any art without variety, (for art is a system, and there can be no system without variety, as well as order and regularity).

(第Ⅳ巻, 5頁)

(d) 漸進的品格をもつ

「多くの経験が、art を作る。そして、もし人間が最初に実践から始めなかったならば、どんな art も形成されなかっただろう。その実践は、初めは疑いもなく非常に粗野で不完全だったろうが、徐々に改善されて、遂に一つの art へと形成されたのである。」

many experiences make art ; and no art ever would have been formed, if men had not first begun with the practice ; very rude and imperfect no doubt at first, but which was improved by degrees, and at last formed into an art.

(第Ⅱ巻, 484頁)

以上のように見てくると、モンボドが art について非常に深く考えをめぐらせていたことが分かる。

ハリスが強調していた art と science の区別と相互の関係については、モンボドは詳しく述べていないようであるが、次のよう文がある。

「これ [分割と定義による類と種の技能] は、「技能のなかの技能」であると言って良いだろう。なぜなら、それは、それによって、諸技能と諸科学が作り上げられる技能だからである。」

This [the art of genera and species, dividing, subdividing, and defining] may be said to be the art of arts, since it is the art by which arts and sciences are made.

(第Ⅱ巻, 443頁)

この考え方は、ハリスのものとは明らかに違う面をもっている。ハリスは、art と science の違いを強調していた。モンボドは、art をずっと広く捉えている。人間知性によって生み出されるすべてをいわば広義の art とし、そのうえに狭義の art と共に science を位置付ける、という構図である。

モンボドにおいては、ハリスの場合と違って、art 以前の「art」を何と呼ぶべきかとか、art と science を包括する概念はないのか、という問題は生じないのである。

モンボドが art の概念をここまで掘り下げてきた結果、現代で言う、例えば、ロングマン英語辞典の項目 3 に見られるような「culture」の概念にほとんど到達していることは、驚くべきことであると思われる。

→ art についてのまとめ (第 3 段階)

art はまず、本能と、従って、自然と対立するものである。一言で言えば、それは「獲得された習慣」である。そして、その特性として、規則や方法に従うことを含む計画、体系をもち、多様性と美しさを備え、徐々に高度になり、人間の行動・実践に不変性と安定性を与える性格が挙げられる。

art がこのような内容をもった語であることを知れば、言語が art と呼ばれた理由だけでなく、まさに art の代表格のものと考えられていたことが、完全に納得されるだろう。

☆ art に関連する諸概念

ここで、これまでの検討の中で art に関連して出てきた重要な概念をまとめて指摘だけしておこう。まず「自然」「本能」、次に「科学」、そして、基礎にある「実践・行動」「経験」「実験」、art の基本特性としての「計画」「体系」「規則」「方法」「進歩」、その他に「多様性」「美」「不変性・安定性」などがある。

3. art という語の英語における歩み — 主として OED による

18世紀における art の概念を見てきたが、この語の18世紀以前の歩み、また、18世紀以後の歩みを知らんとする際に最大・最良の手段となるのは、『オックスフォード英語辞典』*Oxford English Dictionary* (略称 OED) である。そこで、OED の art の項目を読むことにしよう。

(1) art の項目全体の構成

全体は、六つの大項目に分かれ、第Ⅰの項目は六つ、第Ⅱの項目も六つ、というように細分されている。原文は省略して、大項目の記述を紹介する。[1. c.1225 とは、この意味での最初の用例が1225年頃に現われていることを表す。† 4. c.1300/1656 とは、現代では、この意味で用いられることはなくなっていることを示し、最初の用例が1300年頃に現われ、最後の用例が1656年に見られたことを表している。]

[語源的には、古フランス語 art から、古フランス語の主格・単数 ars, それはまた、ラテン語 ars から]

I. 巧みさ。その發揮または適用。単数 art (抽象的に), 複数にしない。

1. c.1225 2. a. c.1386 †b. 1667 3. †a. c.1305/1573 b. 1588 c. 1628 †4. c.1300/ 1656 5. 1620 6. 1668

II. 巧みさが獲得されるか發揮されるようなあるもの。単数 an art, 複数 arts.

7. a. c.1300 †b. c.1300/c.1450 8. 1489 9. a. 1393 b. 1832 10. a. 1597 11. a. 1393 b. 1509 12. 1637

III. 巧みな, 器用な, わざとらしい振る舞い。

13. c.1600 14. 1597

IV. 句に。

15. 1674 16. a. c.1425 b. 1515 17. 1888

V. 複合語に。

18. 1839 19. a. 1868 b. 1890 c. 1929

VI. 英文脈でフランス語をそのまま用いて。

a. 1959 b. 1955 c. 1966 d. 1946 e. 1946 f. 1901

以上のことから分かることは、①外来語であること ②最初は抽象名詞として13世紀初期に用いられ始めたこと ③14世紀初めから普通名詞の用法が見られること ④特定の行為をさす意味が16世紀終わりに現われたこと ⑤固定した句は15世紀, 複合語は19世紀からであること等である。

(2) 18世紀に中心的だった意味の記述

第2章で検討した art の意味は、OED では II.12である。

[12. 何らかの種類の獲得された能力。それをするのに巧みさが研究と練習によって獲得できるような何かをする力能。コツ。]

An acquired faculty of any kind ; a power of doing anything wherein skill is attainable by study and practice ; a knack.

この意味は、13世紀初期に英語に入ってきた art という語が、400年を超える歴史の中で最後に到達したものである。この意味で用いられるようになってから更に100年以上を経て、モンボドに見られるような「自然」と対照区別される、人間によるすべての産物を生み出す能力、にまで深められ、広げられたのだった。

ついでに指摘しておくが、辞典によるだけでは、ここでは OED によるだけでは、18世紀に art がこれほどの重みをもった語であったことは、必ずしも見えてこない。辞典は手掛かりにすぎない。原典を通して、その作家の精神、その時代の精神や社会的状況に迫る努力を重ねる必要がある。

(3) 重要な指摘、二つ

OED の記述を一つ一つ読んでいくと、次のような重要な指摘に出会う。

① art は、「自然」と対立させて用いられることがある

「2. a. 動作主としての人間の熟練の技。人間の優れた手並み。「自然」と対立させて用いられる。」

Human skill as an agent, human workmanship. Opposed to nature.

② art は、「科学」と対比して用いられることがある

「8. ある科学の実際的应用。一定の諸原理の遂行を容易にするのに役立つ規則の集合あるいは体系。この意味では、しばしば「科学」と対比させて用いられる。」

A practical application of any science ; a body or system of rules serving to facilitate the carrying out of certain principles. In this sense often contrasted with *science*.

この二つの指摘は、18世紀における art の概念を検討してきたわれわれにとっては新しいものではないが、art という語の概念的内容を把握しようとする立場からは、やはり注目すべき指摘であることに変わりはない。「自然」との対立的意味は、モンボドが強調したことであり、「科学」との対比的意味は、ハリス、ブリタニカ百科事典、フランスの百科全書に述べられていた。このように、具体的に実際の文献にあたってみると、OED の記述も生き生きしたものに感じられる。

(4) 現代の意味とそれに関する指摘

ところで、現代においてまず思い浮べられる art の意味は、OED では次のように記述されている。

「6. 「絵画」、「版画」、「彫刻」、「建築」という模倣と構想の芸術への熟練の技の適用。原理、実践、作品におけるそれらの芸術の洗練育成。視覚的形態における美しいものの巧みな産出。」

The application of skill to the arts of imitation and design, painting, engraving, sculpture, architecture ; the cultivation of these in its principles, practice, and results ; the skilful production of the beautiful in visible forms.

このように意味を記述した後、小さい文字で次のような注記が加えられている。

「これが、何も修飾を付けずに用いられた場合の art のもっとも普通の現代の意味である。この意味は、1880年以前の英語辞典には現われず、今世紀に至るまで画家と絵画に関する著作家によって主として用いられてきたと思われる。」

This is the most usual modern sense of art, when used without any qualification. It does not occur in any English Dictionary before 1880, and seems to have been chiefly used by painters and writers on painting, until the present century.

上の(1)で示したように、この意味の初出例は1668年となっている。初出後、200年以上たった19世紀末の段階で意味を整理して、その意味で用いられた例をさかのぼっていくと、17世紀半ばにすでに見られる、ということである。しかし、その初出の時代から200年たった19世紀半ばにも、辞典編纂者には意識されずにいたことになる。そのようなズレ自体が非常に面白い現象であるし、art から culture への転換を問題にする立場からは、重要な事実である。転換の時期などを推定する際の一つの大切な手掛かりである。

英語の art という語それ自体については、以上で終わりにする。

(5) **science と nature の関連部分を見る**

art と対比的、対立的に用いられることのある二語、science と nature について、関連部分を見ておくことにしよう。

① OED : science 3. a. と b.

まず science について、art と同義的な意味。(ジョンソンの辞典の記述も参照)

「3. a. 知識あるいは研究の特定分野。学問の正式に認められた部門。 c13..」

A particular branch of knowledge or study; a recognized department of learning.

以下は注記。

「中世では、「七（自由）sciences」という言い方が、しばしば「七自由 arts」と同義的に用いられた。それらは、「三学科」（文法、論理学、修辞学）と「四学科」（算術、音楽、幾何学、天文学）からなる学問の集まりを指していた。」

In the Middle Ages, 'the seven (liberal) sciences' was often used synonymously with 'the seven liberal arts', for the group of studies comprised by the *Trivium* (Grammar, Logic, Rhetoric) and the *Quadrivium* (Arithmetic, Music, Geometry, Astronomy).

次に、art と対比されて用いられる意味。(ハリス等を参照)

「3. b. art と対照区別して用いられる。ART 実詞 8 を見よ。 1678」

Contradistinguished from *art*: see *ART sb.* 8.

以下は注記。

「一般に理解されている区別では、科学（＝エピステーメ）は、理論的真理に関わり、技能（＝テクネー）は、一定の結果を生み出すための方法に関わる。しかし時には、「科学」という用語は拡大されて、知識と、原理の意識的適用とに依存する実際の仕事の一部門を指すことがある。「技能」は、他方、伝統的規則の知識と習慣によって獲得される技巧を要求するだけである、と考えられている。」

The distinction as commonly apprehended is that a science (= επιστήμη) is concerned with theoretic truth, and an art (= τέχνη) with methods for effecting certain results. Sometimes, however, the term *science* is extended to denote a department of practical work which depends on the knowledge and conscious application of principles; an *art*, on the other hand, being understood to require merely knowledge of traditional rules and skill acquired by habit.

② OED : nature VI. 11. と 11. d.

次に nature の項を見ると、art と対比される意味は、すぐには出てこないで、まず次の記述がある。

「VI. 11. 物質的世界の中で働いており、その世界のすべての現象の直接的原因と考えられている創造的で規制的な物理的力。 13..」

The creative and regulative physical power which is conceived of as operating in the material world and as the immediate cause of all its phenomena.

このように説明した後、その下位項目の d. で次のように述べている。

「d. 技能と対比させて用いられる。(ART 実詞 2 を見よ)。また、自然に対する忠実さあるいは自然への密着。自然さ。 1704」

Contrasted with *art*: (see ART sb. 2). Also, fidelity or close adherence to nature; naturalness.

これらの記述も、18世紀の文献の具体的検討を踏まえているわれわれにとっては、基本的には新しいことはなにもない。

(6) 18世紀における art を中心とした主要概念・語の整理

これまでの検討の内容を art を中心に整理すると、まず① art と science がまとまって、大きく nature と対立する ② art は、science とは重なる部分を持ちながら、同時に区別される ③ art には、経験、実験、方法などがより密接に関わり、science には、理論、原理などがより密接に関わる、という構図が描けるだろう。(なお、18世紀には、歴史、芸術と区別された学問全般を総括的に philosophy と呼ぶのが普通だったと言える。)

< art を中心とした諸概念関連図 — その 1 ; art / science : nature >

man	(重なり合う部分)	philosophy
skill, rule	trivium., quadrivium.	theory, principle
habit ART diversity	progress	SCIENCE pure
moral beauty	method, system	metaphysics / physics
experience, experiment	knowledge	truth speculation
<hr/>		
God : The author of	material world	
nature instinct	NATURE	creative power phenomena

☆ラテン語における ars (= art) の意味

ついでに、ラテン語における ars の意味を OLD (Oxford Latin Dictionary) で分けられている10項目のすべてからそれぞれの主要部分を紹介しておこう。

- 1 実践において獲得され発揮されるものとしての専門的、芸術的、あるいは技術的巧みさ、...

Professional, artistic, or technical skill as something acquired and exercised in

- practice, ...
- 2 (特に *natura* [出生, 自然], *ingenium* [天賦のもの, 天性] 等との対比がはっきり述べられたり, 含意された場合) 人為的方法, 人間による巧妙さ, ...
(spec. where a contrasted with *natura*, *ingenium*, etc., is stated or implied) Artificial methods, human ingenuity, ...
 - 3 ずるい行動, 策略, ... A crafty action, trick, ...
 - 4 (通常, 特定の形容詞がつき複数で) 行動に表れたある個人の特徴あるいは特質, 習慣, ...
(usually with spec. adjs. and in pl.) A personal characteristic or quality as manifested in action, a practice, ...
 - 5 知識と実践的技術の体系的集合体, 一つの技能あるいは科学...
A systematic body of knowledge and practical techniques, an art or science. ...
 - 6 *bonae* [良い, 優れた], etc. *artes* 等の形で, 文化的探求, 教養的研究... b (特定の形容詞なしで) 美術あるいは自由技能の一つ, 教養的文化。
bonae, etc., ~es, Cultural pursuits, liberal studies. b (without spec. adjs.) one of the fine or liberal arts, liberal culture.
 - 7 専門職, 技能, 手仕事, 商売, 職業... A profession, art, craft, trade, occupation. ...
 - 8 芸術的達成あるいは演技, ある人の技能あるいは技巧, ... b (具体的に) 芸術作品, 創案, ...
Artistic achievement or performances, a person's art or artistry; ... b (concr.) a work of art; an invention, ...
 - 9 (単数または複数で) ある技芸の規則あるいは原則, 理論的考察, ...
(sg. or pl.) The rules or principles of an art, theoretical considerations, ...
 - 10 方法, 体系, 手順。分類の原理。
A method, system, procedure; a principle of classification.

これらの記述を見ると, この語は, ラテン語においてすでに多様な意味の展開を遂げていたことがわかる。英国の知識人たちは, フランス語, ラテン語の文献に用いられている抽象語に接し, それを英語に取り入れた。英語固有の抽象語が未発達だったからである。[ノルマン人による征服の一つの結果である。] 英語に定着した外来語は, しかし, 本来の意味にそいながらも, 英国文化に固有の論理によって意味の変化を行なうようになると思われる。古典の教養をもった知識人たちは, それぞれの時代において, 外来語の本来の意味を尊重する用い方を示そうとしてきたに違いない。

ハリスは, 大学卒業後故郷に戻り, 十年以上古典の研究に没頭し, 若いときに受け入れた当時流行の経験哲学を批判するようになった人であったし, モンボドも, 当時屈指の古典の知識をもった人と評価されていた。彼らは, 古典の研究に基づいて, 外来語の理解を正し, 更に深め広めようとしたのである。例えば, 上のラテン語の *ars* の記述を見れば, いかにモンボドが英語におけ

る art に関する思索を、ラテン語における用法の十分な把握に基づいたうえで、展開しているかが理解される。外来語の研究、少なくとも英語における外来語の研究は、外国語の単語が定着したかどうか、その時代はいつか、という表層的な調査に止まってはならないだろう。

4. 18世紀における人間・社会把握の理論的枠組みの中での art の位置

これまでの検討から分かるように、18世紀において art の概念をもっとも深く広く展開した人として、モンボドを挙げることができる。

モンボドは、第2章で指摘したように、後の「culture」とほとんど重なるほどの理解に到達していた。どうしてそれが可能になったのだろうか。それは、art の概念の把握それ自体をめざした結果ではなかったし、古典の理解が深く広がったというだけでもない。

(1) 「人類史」という構想

彼は、「言語の起源と進歩について」[彼の著作の題名] 6巻の著作を書いた。

言語の起源ということになると、問題は、人間とは何かという問いそのものと重なりあう。また、人間社会はどのようにして成立したのか、という問題でもある。言語という一要素を取り上げて、その成立を問題にすると、大きい「人類史」の展開と一致する部分をもたざるをえない課題になって来るのである。彼は、その課題を追求する中で、基礎概念の一つに art を据えたのだった。その際に、彼の古典の知識が生きてきたのである。18世紀には、西欧全般において、特にスコットランドにおいて、「人類史」を構想する顕著な思想的流れが存在したと言えるようである。

(2) art の位置付け

すると、art の特性を示すための概念とか、対立・対比される概念とかではなく、art と並んで人間・社会と深く関わる概念が設定されていると予想される。その点に関して、深い理解に基づいた簡潔な、もってこいの文章がある。(山崎 怜「あるスミスの蔵書について」『香川大学経済論叢』44巻1号(1971), 35-6頁)

「モンボドゥによれば、言語は人間における *acquired habit* の産物であるが、それは言語の *form* [形相] たる「観念」と *matter* [質料] たる「音声」とがともに経験と *acquired habit* の所産であることによる。もともと a wild savage animal [野性の野蛮な動物] にすぎなかった人間がそこから離脱しえたのはこの *acquired habit* の結果であり、いいかえれば art と industry [精励] の行使であって、これにより欲望は自然的限界をこえて多様となり、更に art と industry を発展させ、やがては「道具の道具」(*instrument of instruments*) をうむのである。しかも、モンボドゥによれば、この art と industry を生起させるおなじ原因、すなわち、*necessities of human life* [人間生活の諸必要] と *self-defence* [自衛] が人間に *civil society* [市民社会] を形成させるのであって art と society とは相即かんけいにあった。そこで、かれにおいては言語は art と industry の産物であるとともに *civil society* の産物な

のであるが、他方では逆に art と industry も *civil society* も言語によって一層その内実をあたえられるのである。

かくして *acquired habit* を基礎範疇としながら art と society と language の三位一体が確立するわけであるが、このばあい、三者は単に同時相即的な循環論法ではなく、art の先行性、ついで society、さらに language という発生順序が進化論的に説明される。だから、*civil society* 自体についても政府のない初期段階から「長老」政府の中期段階、そして本来的な政府のある後期段階へと歴史性をもつように、art にしても language にしても一定の進化性をもつのである。

生産力の発展と社会かんけいの成立のなかから言語の発生を論じ、後者によって前者が一層の深化をとげるとするモンボドゥの所説は人間の人間たる所以をさしあたりは art の存在、ついで society の形成、最終的には language の発生にもとづくものとするのであ[る]...

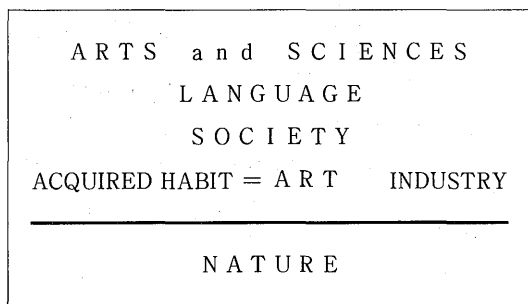
もはやあきらかなように、これはひとつの卓越した「市民社会」の論理と歴史であ[る]...」 []内は、引用者の補足。

単に art のみを取り上げて、その内容を検討深化させるというのではなく、彼は、このような大きい枠組みのなかに art を位置付け、人間の特性、「社会」や「言語」との関わりの中でその内容を掘り下げて行ったのである。と言うよりも、人間の特性、社会や言語の成立について掘り下げていくなかで、その基盤にあるべき「獲得された習慣」という概念に到達し、それを一語で表現するのに適切な語として、art が選ばれたのだと思われる。

なお、上の引用文中の industry であるが、これも現在まず頭に浮かぶ「組織的な労働、産業」[OED 初出 1611]「産業の一分野、製造業」[c.1566]という意味ではなく、「精励、勤勉、努力」[1531]という意味である。また、society の「社会」という意味は、「1577年以前」[‘以前’というのは、その年と確定できないが、それより前であることは確かということ]となっている。

ここで、上にならって関連概念を図示すると、次のようになるだろう。

＜ art を中心とした諸概念関連図 — その 2 ; ART : NATURE ＞



まず acquired habit である ART が NATURE と対立する。ART と並んで industry が基盤に位置し、その上に society が成立し、更にそれらを基礎として language が人間のものとなる。そして、そのような諸条件に支えられて、さまざまな art とさまざまな science が産み出されることになる。

この「関連図」について、「それはモンボドの特異な考えによる特殊なものにすぎないのではないか」という疑問が出されるかもしれない。だが、そうではないのである。

基本的には、第 2, 3 章での検討でその疑問には答えは出されているが、念のため要点を押さえておくことにしよう。

彼によって基本的な語として art が選ばれたのは、すでに art を nature に対立させてとらえる用法が英語では 14 世紀末以来存続してきたし [上記 OED 2. a.], もちろん nature についても、特に art と対比して用いられる意味も成立しており [上記 OED VI. 11. d.], そのような意味をふまえながら、更に彼の古典の知識からしても適切であると判断されたからであるに違いない。

ついでながら、OED art 2. a. の初出年代は、c1386 であるのに、OED nature VI. 11. d. の初出年代が、1704 となっているのは、不思議である。c1386 の初出例はチオーサーの文で、Nature ne Art ne koude hym nat amende. 「自然も人の技も彼を癒すことはできないだろう」である。単に含意としてではなく、明確に nature が用いられている、しかもはっきり対比して。他方、1704 の初出例はポウプの文で、Theocritus excels all others in nature and simplicity. 「テオクリトゥスは、自然さと平明さで他のあらゆる人に優っている」であり、しかも art 2 への参照を指示している。どう考えても、このズレは、この nature の項目を担当した編集者の配列間違いとする以外に、説明できないのではなかろうか。というのは、IV. 11. の (d. ではなく) 最初の項目 [そこには、自明なので a. と明示はない] の初出年代は、13. ., b. c1374, c. 1597 となっているのだから、年代的には b. に含めて良いからである。OED は最高の辞典であるが、盲従してはならないという実例の一つになるであろうか。— 日本語で「自然」と「自然さ」が異なるように、nature : naturalness, art : artificiality / artfulness のそれぞれの対比を問題にしているのだ、とも言えないことはないが、釈然としないところが残る。

議論を元に戻すと、したがって、語の個々の意味内容については、モンボドが特別に深く広くとらえ、厳密に内容を規定している場合が多くあっても、用いられるべき語とそれらが相互に関連していることについての共通の理解が存在していたのである。例えば、art から society へ、そして language へという構図についても、モンボドの特異な考えのように受け取られるかもしれ

れない。しかし、問題を論理的に展開し、自らの明確な回答を提出したのが彼の素晴らしいところだが、「社会」が先か「言語」が先か、という問題は、すでにルソーが当時広く読まれた『人間不平等起源論』（1755）のなかで自分には解決不可能なこととして述べていた。モンボドは、そうすることは大変な努力の結果であったとしても、ルソーの問題提起に彼なりの回答を提示したに過ぎないのであって、特異な問題を設定し、特異な用語を考え出したりしたわけではない。もう一つ例を挙げれば、ハリスの art と science の関係についての記述と、デイドロによる百科全書における art の記述がほとんど一致することにも、時代の全般的構図が表れている。

そういうことであるから、上の「関連図」は、モンボドの思想に基づく構図であると同時に、細部に違いが有るのはむしろ当然だが、18世紀英国における、更には西欧全体における、諸概念の関連を示すものと受け取ることができるのである。[科学史で言われるパラダイムと同じように考えられる。]それは、「その2」だけでなく、もちろん「その1」についても言える。

5. 18世紀における諸概念の関連を揺るがせる動き

18世紀の西欧の、英国の知識人たち—哲学者たち [フランスでは philosophes—自由思想家と訳す人もいる—と呼ばれた]—が、上で述べた諸概念の関連を作り上げる努力を続けているときに、実は、同時にその関連を大きく揺るがせる事態が、彼ら自身の研究や別の分野の人々によって進行していた。

それを言語の面から眺めてみよう。その際に注意すべきことは、新しい事態が明確に言語に表現されるには時間がかかるという点である。例えば、新しい学問分野の名称が提出されるには、すでにその分野の研究が無自覚のうちにもかなり進行しているという場合がおおい、ということである。

三つの側面から眺めてみることにする。

(1) 新しいアプローチによる自然諸科学の成立

① 生物学 biology

biology という語自体が、新しい。1813に、現在は廃用の「人間の生活と性格の研究」という biography [伝記, 伝記研究] とほとんど同じ意味で用いられはじめた。科学としての「生物学」は、初出1819である。

② 化学 chemistry

化学的研究の歴史は、古い。中世から16世紀まで錬金術 alchemy として「研究」が続けられてきた。科学的な研究としては、17世紀からとされている [3. a. as an art or process]。OED の記述は興味深いところを含んでいるので、引用しておこう。

「すべての物体が構成されるいくつかの基本的物質あるいは物質の形態、また... (中略) さまざまな現象を扱う自然科学と研究の分野。」

That branch of physical science and research, which deals with the several elementary substances, or forms of matter, of which all bodies are composed, ... and the various phenomena ...

以下は注記。

「化学はそこで一つの science であり同時に一つの art である。後者は、「応用または実用化学」と呼ばれ、より初期の著作家が化学と呼び、初期の辞典で説明されているのは、これである。」

Chemistry is thus at once a science and an art; the latter, called *applied* or *practical chemistry*, is that referred to by the earlier authors and explained in early dictionaries.

ところで、科学としての「化学」は、初出1788である [3. b. as a science]。なお、形容詞 chemical の「化学的」という意味の初出は、1791である。

③ 物理学 physics

physics は、語自体の初出は、1589で、意味は語源的にも当然ながら「自然研究全般、広義の自然哲学」。科学としての「物理学」は、初出1715である。

④ 生物学者 biologist などの呼称

なかでは、「解剖学者」anatomist の1594 が群を抜いて早い。「化学者」chemist の1626 [はじめは、錬金術師の意味で、1562] も早いほうである。ついで「生理学者」physiologist の1778、「生物学者」biologist の1813、「物理学者」physicist の1840 と続いている。

関連語、派生語などを丹念に見ていけば、興味ある事実が沢山見出せると思われる。

これらの諸科学の成立に向けての流れが、「関連図」のどこをどのように揺るがしたのだろうか。

① SCIENCE 全体が、speculation [関連図その1 参照] から離れて、NATURE に接近・密着する方向に動くこと [これを下降としよう]

② 同時に、experiment が、ART の領域からSCIENCE の領域へ動くこと [これは水平方向の移動である] [やがて、experiment は、observation と対比・対立的に用いられるようになる]

③ speculation の要素が、独自領域としての philosophy の形成へと動くこと [上昇とする] [そうして学問全体を総括的に指していた philosophy からの sciences の分離・分出が完成して行く] などである。

つまり「関連図」のなかで、「下降」もあれば、「上昇」もあり、「水平方向の移動」も行なわれつつあったことになる。これは、思想・観念の歴史においては大変動と呼んでも良いだろう。

(2) 生産の現場での変化—いわゆる「産業革命」に関連する変化

「産業革命」を言語的な側面から追跡するというのは、私自身関心はあっても、まだ何も考えを煮詰めていない [方法論的にも難しい] ことなので、ここでは、重要と思われる若干の語を中

心に思いつく関連語も取り上げて調べ、「関連図」に及ぼす影響を考えてみたい。どの項目も、具体的に細かく追跡するならば、一冊の本になるようなものばかりであるが、乱暴だが、大まかな展望だけ得られるようにしたいと思う。

① “engine” 関係の語

まず steam-engine は、より初期の fire-engine, atmospheric engine に取って代るものとして、1751に登場する。そして、1815には、「機関車」を指す意味が現われる。単独の engine は、中世に初出を見る [c1386 「天賦の才」] 語であるが、steam-engine の意味で1816に用いられ始め、限定語を付けて、locomotive engine, marine engine, pumping engine, railway engine のように使われることになって行く。

ついでに挙げると、engineer は、最も古い意味は、「攻撃や防衛のための軍事的工物を考案、建設する人」(c1325) で、その意味が一般化して、今では廃用になった「工夫したり、発明する人」(c1420) に続き、1606に「技師」の意味が登場する。これは18世紀からは、軍事関係との対比で、civil engineer が用いられるようになり、特に「土木技師」を指す面が強くなる。1606に初出例が見られるとはいえ、18世紀になっても engineer といえば、軍事をまず連想したことを物語っているのである。なお、engineering の初出は、1720で、civil, military, agricultural, gas 等々の限定語を付けて用いることが多い。

② “machine” 関係の語

machine は、初出1549 [「仕組み、仕掛け」] の語だが、「それぞれが一定の機能をもっている多くの相互に関係した部分からなる、機械力を用いるための装置」An apparatus for applying mechanical power, consisting of a number of interrelated parts, each having a definite function という意味が、1673に現われる。さらに「運動伝達機構」の意味が早くも1704に初出を見る。

[[機械学] 力を伝達したり、その適用を変化させるために用いられる道具。「単一機械」：複数の部分の結合を持たないもの、例、梃子あるいはいわゆる「機械力」のもの。「複合機械」：二つ以上の部分の結合した動きによって能率が決定されるもの。]

Mech. Any instrument employed to transmit force, or to modify its application. *Simple machine* : one in which there is no combination of parts, e.g. a lever, or any other of the so-called *mechanical powers*. *Compound machine* : one whose efficiency depend on the combined action of two or more parts.

なお、形容詞 mechanical の「機械に関係した」Having to do with machinery という意味は、1793初出である。

なお、「動力」の意味の power の初出は、「馬力」horse-power と同じで、1806である。

③ “factory” 関係の語

factory という語自体は、1560初出だが、「工場」の意味は、1618に現われている。manufac-

tory は、1618年初出で、「工場」の意味は、1692で、cotton manufactory, milk manufactory のように限定語を付けて用いられることもある。この二つはいずれも外来語だが、mill は、本来語で、「工場」の意味は、1502と早く、限定語を付けて、cotton-mill, silk-mill, silver-mill のように用いられる。同じく本来語の works もかなり早く、1581に「工場」の意味の初出を見るが、初期から1860年頃までは、単数形でも用いられた。複合語の第二要素としてとして用いられることも多い。plant は、古英語期にラテン語から入った外来語だが、1789にいわゆる「プラント、工場」の意味が現われる。

④ “manufacture” 関係の語

manufacture は、『百科全書』にも「集合マニユクチュール」と「分散マニユファクチュール」の区別を立てて取り上げられているが、(岩波文庫訳では、242-251頁)、英語では1567初出で、産業の特定分野を示す意味では、1683に初出であり、linen, woollen, worsted のような名詞を前に付けて用いられることも多い。「材料から作る、作り上げる。労働によって生産する(今では特に、大規模に)」To make or fabricate from material; to produce by labour (now esp. on a large scale) という意味を表す動詞の初出は、1755となっている。ついでながら、形容詞 manufacturing 1722, manufacturable 1784, manufatural 1789がある。そして、「工場主」manufacturer は、初出1752である。

⑤ “technology” 関係の語

今日、technology と聞けば、「(科学) 技術」を思い浮べるが、初出ではそうではない。「ある技能あるいは諸技能に関する論説あるいは論文」A discourse or treatise on an art or arts、「実用的あるいは産業的技能の科学的研究」the scientific study of the practical or industrial arts で、1615である。「技術学、工学」を意味する。これは、語尾の -logy からして、初出としては当然の意味であろう。「総体としてみた実用的諸技能」Practical arts collectively、つまり現在まず思い浮べる「(科学) 技術」は、1859で、19世紀半ばになる。これは抽象名詞であるが、普通名詞化(不定冠詞を付けたり、複数になったり)するのは、さらに100年後の1957である。technology = 「科学技術」となったのは、この頃からで、それ以前は、「実用的あるいは産業的技能」つまり、art の一部であった(現在でも、上の記述に用いられているように広義の art であることに変わりないが)。

この点は、「諸概念の関連を揺るがせる動き」の観点からは、注目すべきである。art 「技能」から、実的なもの、特に産業に関係する「技能」が分出、独立する動きを示しているのだからである。これは、激しい急速なものではないが、大文字の ART も小文字の arts も最終的には、深刻な影響を受けざるを得ない動きである。

この動きの底流を言語的な別の面からも見ることができるようである。

すでに1612には、形容詞 technic 「技能あるいは一つの技能に関係する」Pertaining to art, or to an art が現われ、1798には、名詞として「技術」= 「総体としてみた技術的細部あるいは

諸方法」「ある課題の技術的分野」「特に、ある技能・芸術の形式的あるいは機械的部分」Technical details or methods collectively ; the technical department of a subject ; esp. the formal or mechanical part of an art という意味が成立し、更に、「技術」の technology とほぼ同じ時期の1864年には、「技術学、工学」＝「技能あるいは諸技能の科学あるいは研究、特に機械的あるいは産業的技能について、technology 1と同じ。通常複数形で」The science or study of art or arts, esp. of the mechanical or industrial arts : = TECHNOLOGY 1. Usually in pl. technics も現われた。

他に、「専門的」「技術的」の technical も18世紀前半に初出である (1727-41)。

要するに、art「技能」から、実用的な、特に産業に関係する「技能・技術」が分出し、独立する動きがすでに言語にまで現われているわけである。ここで、この一連の語が、ギリシア語系であることにも注意しておきたい。ゲルマン系の本来語でもなく、ラテン語に由来するロマンス系とも違う外来語なのである。

⑥ industry における意味の展開

この語の意味のうちで、現在まず挙げられる「一般的に工場と大きい組織体（の仕事）」(the work of) factories and large organizations generally (ロングマン辞典) は、もちろんこの語が当初から持っていた意味ではない。それにつながる意味は、初出はずっと古いが、その使用の拡大の基礎がこの時期におかれたと思われる。

まずOEDに従って、この語の意味の展開の後をたどってみる。

industry は、最初は、art の「I. 巧みさ。その發揮または適用 Skill ; its display or application」 と殆ど同じ意味で用いられ、17世紀初期に廃用となった。[OED †1. Intelligent or clever working ; skill, ingenuity, ... 1494/1613 †2. An application of skill, cleverness, or craft ; a device, ... c1477/1621.]

上の廃用に向かっていた意味と並んで、16世紀前半に「何らかの仕事の遂行あるいは努力における勤勉さあるいは精励」Diligence or assiduity in the performance of any task, or in any effort が現われ、更に「現に行なっている仕事に熱心に持続的に取り組むこと」close and steady application to the business in hand という意味にもなる [これがOED 3. 1531]。

「巧みに仕事」をするには、「勤勉、精励」が必要であり、「仕事に熱心に持続的に取り組む」ことが欠かせない、という意味的な関連による展開であろう。

その展開は更に、「組織立った仕事あるいは労働」Systematic work or labour という意味につながることになる。

この点は、art を中心に検討しているわれわれにとって、特に注目すべきである。というのは「関連図、その1」に示した art の特性として挙げられている system, rule, method 等がこの意味にはすべて含まれていると見られるからである。つまり「熱心に持続的に仕事に従事すること」は、その仕事の手順などに system を立て、rule に従い、method を意識して行なうことになる

はずだからである。

初出の際の意味から industry は、art と重複し、関連していたが、意味の変化、展開のなかでもその関係は失われなかったばかりか、内容的には密接さを増してきたとさえ言えるようである。

OED によると、それに続いて「何か有用な仕事に習慣的に従事すること」habitual employment in some useful work となる [4. a. 1611. この記述の後に、「現在では特に、生産的な技能あるいは製造に」と付加されている。生産内労働、産業と理解してよいだろう]。それよりも半世紀ほど早く、「生産的労働の特定の形態あるいは分野。ある産業あるいは製造業」A particular form or branch of productive labour; a trade or manufacture が初出を見ている [trade は、意味を取り難い語であるが、ここでは、manufacture と並んでいることと、cotton-trade のような用法のあることから、産業としておく。] [5. a. c1566]。

OED は、この 4. a. の記述の最後に注として「これが現在、5 と共に、支配的な意味である」と述べているが、ロングマン辞典ほど明確に、「工場」「大規模な生産」という内容を盛り込んではいない。4. 5. の一般的記述から直線的に把握できるものだ、という判断であろう。[現代語辞典ではないことによる判断だろうが、やや不満は残る。]

いずれにしても、このようにして「巧みな仕事」1494、「勤勉、精励」1531から「産業、製造業」c1566、1611への展開を見て、その後もこの語の使用が広がり、重要さが増して行ったのである。

しかし、「産業、製造業」の初出は、16世紀半ば、17世紀初頭で、18世紀よりも1世紀（以上）早い。そのこと自体は重い意味を持つものだが、この項のはじめに述べた「使用の拡大の基礎がおかれた」と判断する基礎にはならない。その判断の基礎（少なくともその一部）は、形容詞を見ることで与えられる。

industry から派生した形容詞は、二つある。industrial [産業の、工業の] と industrious [勤勉な] である。それぞれ初出は、1590、1591。

これもまた初出は16世紀末だが、OED は、industrial の記述の冒頭に、非常に興味ある説明を特に付加している。「(この語は) 16世紀末に出現する。それ以後は、18世紀後半になるまで現われない...」Occurs in end of 16th c.; then app. not till late in 18th. ... というのである。

OED の用例は、初出以降は原則的には1世紀に一つの割りで選択・記載することになっている。わざわざこのような注を入れたのは、17世紀から18世紀半ばまで全く用例が見出せず、後半になってやっと現われることを指摘しているのである。つまり、その時までには見られなかったこの語を用いるのにふさわしい状況が広がっていたことを物語るものである。その事実がまさに、industry の「使用の拡大の基礎がおかれた」状況であると解釈できるし、そうすべきと思われる。

以上、問題の大きさからすれば粗雑な検討に過ぎないが、生産の現場における変化が、どのように諸概念の関連を揺るがせる動きを生み出していたか、その大まかな展望を得ることができたであろう。

この展望をふまえて、大文字の ART、小文字の arts に対して及ぼした影響を中心にまとめてみよう。

<目に見えない art から、目に見える engine, machine 等へ>

元来、art は、人が実際にそれを発揮している過程で目撃するか、あるいは、結果の産物と切り離せない形において目にする以外にないだろう。「これが art です」と客観的形態をとったものとして提示することは、不可能である。

しかし、engine, machine, factory 等は、どうであろうか。当時の人々にとっては、それらは、art が、またその特性である system, rule, method 等が、目に見える形でそこにあるものと考えられたのではないだろうか。そして、そこに客体化されている art を、別の用語で、あるいは既存の語に新しい意味を盛り込んで、表現したいという衝動を覚えたのではないかと思われる。

[この衝動を実証するには、当時の文書を多数読んで、さまざまな比較検討をする必要がある。]

その一つの重要な現れが“technology”関係の語であるし、industry の意味の展開である。

その影響の具体的な内容からすると、ある面では ART からの分出、独立であったり、別の面では arts の一部の取り込みであったりしただろう。それは、ゆっくりとすぐには気付かれない形で、ART, arts の豊かな、しかし、やや漠然とした曖昧な意味を弱めたり、分解して行ったと思われる。

(3) 抽象的概念・抽象語における動き

上の(1)(2)で指摘したような、思弁から離れ、自然に密着した科学研究の新しいアプローチ、生産現場での変化等は、個々の抽象的概念とそれを表現する抽象語の内容の変更を迫るものである。重要と思われるいくつかの語を取り上げよう。

① experiment の場合

この語の名詞としての初出は、「科学」で用いられる意味で、「未知の何かを発見するために企てられる行動あるいは操作,...」An action or operation undertaken in order to discover something unknown,... が、1362となっている。[OED 3.] 普通名詞である。続けて、4. では、抽象名詞的に「そのような操作を遂行する過程あるいは演習。実験作業」The process or practice of conducting such operation; experimentation となる。いずれも特に18世紀に成立したものではない。

しかし、形容詞を見ると、industry の場合と同じ現象が見られる。形容詞 experimental の初出は15世紀半ばだが、「経験」に関連する意味である。「Ⅱ. 実験に関連する」の初出は、1570であるが、「実験に基づく、に由来する、によって確かめられた」Based on, derived from, or ascertained by experiment という意味であり、これでは範囲はまだかなり狭い。もっと広く、いわば漠然と「実験の、実験に関係する。実験においてあるいは実験のために用いられる」Of or pertaining to experiments; used in or for making experiments という意味は、1792が初出となっていることに注目したい。[更に一般化して「実験の性質の、試験的な」は、1818である。]

もう一つ、18世紀に起こった変化がある。

experiment の動詞では、他動詞が廃用^{1524/1776}となり、自動詞が¹⁷⁸⁷に成立している。これは何を意味するのだろうか。用例を見ると、他動詞の場合目的語になっているのは、batail [戦争]、pouder [火薬?]、medicines, engine, the strength of Mortar [モルタルの強さ]である。「実験」するというよりも、「試してみる、試しに使う」という意味である。他動詞では、目的語との関係で動詞の意味が揺れたり、拡散・一般化する傾向が見られることが多いようである。

それに対して、自動詞になると、前置詞 on の後に置かれる事柄に関して「実験する」となり、その意味が動詞に集中・安定し、明確になると思われる。その自動詞の成立が1787であることは、やはり18世紀に「実験」という行動が、その名称が広がった現れではないだろうか。

なお、Experimental Philosophy の初出は、1651となっている。また、experimentalist [実験家、実験主義者] の初出は、1762である。

② science の場合

上の(1)で指摘した新しいアプローチによる諸科学の発展、名称の成立などによって、「科学」自体の概念も変わらざるをえない。最初に持っていた一般的に「研究によって得られた知識」といった意味から、より制限された意味を持つようになる。

「4. a. より制限された意味で：論証された真理の結合した集合体、あるいは、一般的な法則に含められることによって、体系的に分類され多少とも総合された観察事実に関係し、また、それ自身の領域内での新しい真理の発見のための信頼できる方法を含んでいる研究の一分野」

4. a. In a more restricted sense : A branch of study which is concerned either with a connected body of demonstrated truths or with observed facts systematically classified and more or less colligated by being brought under general laws, and which includes trustworthy methods for the discovery of new truth within its own domain.

この意味の初出が1725であることを指摘するだけで、18世紀の意義の確認には十分だろう。なお、上の記述につづく4. b. は、abstract, biological, mechanical 等々の限定語がつく用法となっているが、その初出も18世紀末、1795である。

③ law の場合

英語の law は、人間世界の「法律」と主として自然的世界について言われる「法則」の双方に用いられる。

OED の law の項のⅢ. が「科学および哲学における用法」で、その初出は、1665である。自然の法則 law of nature, 自然法則 natural law である。これは、驚くべき早さと言えるかも知れない。しかし、単純に現在の通念と同じ内容だったと考えてはいけないうらう。項目 17. の注では、「自然の法則 law of nature」という用語が初めて用いられたときには、それを「神によっ

て物質に課せられた命令」とみなされていたことなどが指摘されている。

いわば客観的に存在する「法則」という観念が広がるには、時間が必要だった。「18. 一般化した意味で：一般的に（自然の）法則。法則がその表現となっている自然における秩序と規則性」
In generalized sense : Laws (of Nature) in general ; the order and regularity in Nature of which laws are the expression の初出は、1853である。

④ philosophy の場合

18世紀半ば、『百科全書』[岩波文庫訳、368-374頁「ダランベール「人間知識の系統図」参照]の時代には、すべての sciences を包み込んでいた philosophy は、自然諸科学が実験と観察を武器として自然に密着する方向に動いていくとき、その内容の面で変化しないわけにいかない。

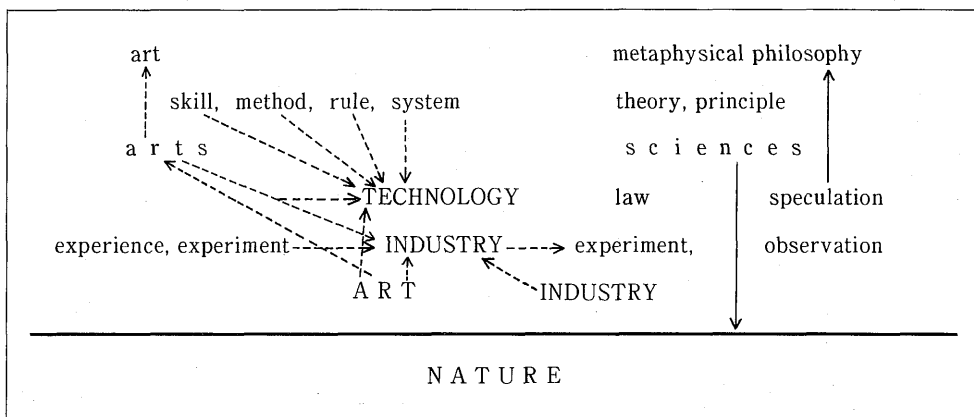
「5. (=「形而上的哲学」) 究極的現実、あるいは事物の最も一般的諸原因と諸原理を扱う知識あるいは研究の部門。(現在これが最も普通の意味)」

5. (= *metaphysical philosophy*.) That department of knowledge or study which deals with ultimate reality, or with the most general causes and principles of things. (Now the most usual sense.)

ということになる。この初出は18世紀末、1794である。

この「抽象的観念・抽象語」の項では他に、structure, system にも触れたかったが、省略する。以上の検討をふまえて、諸概念関連図に、不十分ながら、動きを加えてみよう。

<art を中心とした諸概念関連図 — その3 : 関連の変動>



(注) 実線は、全体的な移動を示す。点線は、内容の部分的な移動・移行を示す。

図にそって、本稿の主題に関係する二つのことだけ指摘しておきたい。

① ART は、industry と technology に相当の内容を分出させる。それと同時に、arts と sciences をまとめて包括的に NATURE と対立・対比される性格が弱まる。これは、sciences が NATURE に密着するように動く結果である。そこで、大文字の ART がそのまま存在し続けることが難しくなり、science と対比される art に縮減する方向への動きが生ずる。

② arts は、同じく industry と technology に部分的に（実用的、産業に関わる部分が）移動・移行する。と同時に、残った非実用的 arts のなかでもとりわけ skill, technique [初出 1817] に関わる部分が意味を縮小・特殊化させながら、徐々に「美術・芸術」の方向に動いて行く。言語における変化の通例として、こうした動きは、短くても世代単位、長い場合には世紀単位で考えなければならないものであろう。例えば、19世紀後半に出た『ブリタニカ百科事典』9版の、ART の項は、「この語の最も拡張され、最も行き渡っている意味では、われわれが自然から区別するあらゆるものを意味する」ART, in the most extended and most popular sense of the word, means everything which we distinguish from Nature. という文で始まる。「関連図、その2」の構図がまだそのまま生きているのである。また、すでに指摘したように [本稿3. (4)], art の「視覚芸術」の意味は、1880年以前の英語辞典には、登録されていなかった。このようなテンポであることを念頭におかなければならないわけである。

以上の点を考えると、言語が、19世紀においても依然として art, art の代表格の存在として捉えられていたことは、明らかであるし、当然とも言えるのである。

上で触れなかった点の一つだけ取り上げて、簡単に述べておくことにしよう。

<18世紀における art の概念とエリート主義>

OED の記述からは必ずしもはっきり読み取れない面として、18世紀における art の概念には、エリート主義的感じが付きまっていたことを指摘しなければならないだろう。

第2章の(2)で扱ったハリスの場合は、その点は明瞭である。というのは、「経験」だけでは art になり得ず、それが「思弁」や「原理」に基づいている science と結びつかなければ、真の art になり得ないとされた。つまり、philosophy を学び、それに基づいて経験から築かれた粗野な技能の批判的検討が出来る人々だけが真の art に到達できるのだ、ということになる。更に、ハリスにとっては、philosophy とは、ギリシア、ラテンの古典を通して初めて学ぶことのできるものであった。社会のエリート以外には、不可能なことである。それを考えると、ハリスの場合のエリート主義は、彼の art の概念自体に含まれていると言って良いだろう。

モンボドの場合は、やや複雑である。

第2章の(2)の③で引用した文から分かるように、彼は、人間—つまり総体としての人間—人類 [多分、「人類」という観念に到達した早い例の一つだろう]—が作り上げた世界をまとめて art の世界とする。その点では彼の場合は、ハリスのような定義上からするエリート主義とは違っている。彼の場合には、art の概念の中へ彼の時代のイデオロギー、彼自身のイデオロギー

がいわば外から持ち込まれるという側面を持ったのだった。[彼は、Lordとして、当時のスコットランドの150人ほどの支配者層の一人であった。J. D. Mackie: *A History of Scotland* (Pelican, 1987) p. 262 参照]

それは、最終的には、人間に等級の区別を付けることに現われたと言えるだろう。

当時、「野蛮人」savage や「野蛮な」barbarous / wild 種類の人間と「文明化された」civilized 種類の人間の区別は当然とされていた。「大航海時代」以来伝えられて来たヨーロッパから遠い土地の人々に関する情報は、その区別に関する確信を固める働きこそすれ、崩すように働くことは殆どなかった。(時代のイデオロギーの強固さであろう。) モンボドは、そのような情報が伝える彼と同時代の横の広がりにおける — いわゆる共時的な — 相違を、時間的な縦の経過における — いわゆる通時的な、歴史的な — 相違にそのまま投影したのだった。一定の基準で評価された現在における違いを、ただちに歴史的な発展段階の違いを示すものと読み換えたのである。

具体的には、例えば、「野蛮な言語」barbarous language と「技能の言語」language of art の区別に現われる。

彼は、ある言語を評価するために、音声のレベル、語彙のレベル、文法のレベルで基準を設定する。要点だけ指摘すると、音声に関しては、母音と子音の割合を問題にし、音声の多様な区別には母音よりも子音の方が役立つのであって、野蛮な言語ほど、母音が優勢であるとする。語彙に関しては、抽象語の存在を問題にする。野蛮な言語ほど、抽象語が少ないというわけである。文法に関しては、技能の言語が備えるべき三つの重要な言語の技能 arts があると言う — (a) 複合 composition [既に存在している語を結合して、別の観念を表す新しい語を作る方法] (b) 派生 derivation [既に存在している語に何らかの付加や変化をほどこし、その語と関連のある観念を表す語を作る方法] (c) 屈折 inflection [表される観念は同一のまま、何らかの付加や変化をほどこして、異なった関係を表す方法。名詞の格、動詞の時制・法など] である。これらが完全に備わっているギリシア語、サンスクリット語が模範的な技能の言語であると位置付ける。それに対して、単音節語を用いる中国語は、長い歴史にもかかわらず野蛮な段階に留まったままだということになる。これは、ヨーロッパ中心主義である。

このように、同時代の横の広がりに見られる相違を、歴史的な縦の経過における相違にそのまま読み換えるという方法的態度は、人間全体に適用されて、ヨーロッパ中心主義としても現われることになるし、他方、ある社会に適用されると、粗野で無知な一般大衆と少数のエリート集団という区別を当然のこととする態度となるであろう。

言語は、一般庶民の使用に任せておくと墮落する。言語の墮落は、精神の墮落を表すものであり、あらゆる技能の墮落に通じて行く。従って、言語の墮落を防ぐために、言語の維持・発展は、古典語の知識を持った人々の手に委ねられるべきである、という結論になる。[モンボドの頭には、アカデミー・フランセーズのような組織があったのだろう。その『紀要』をよく読んでいた。]

モンボドのために一言弁明しておく必要がある。一般にエリート主義、自国・自民族中心主義は、決して彼だけのものではなく、世界のいつの時代にもどこでも見られたし、現に見られる

ものである。むしろ、彼の場合には、単純に時代の常識的イデオロギーに流されずに、出来るかぎり厳密な検討を進めたところにその優れた点があった。具体的には、art の概念を大きく nature との対比で押さえ、本能との比較のなかでその漸進的性格を取り出しているし、また、言語においても、当時の通念だった漠然とした「野蛮な言語」と「文明化した言語」の区別に甘んじることなく、いくつものレベルについて、可能なかぎり資料を集め、客観的に追求しているのである。その着眼点や内容は、現代の「客観的」で「科学的」な研究に通じている。

にも拘らず、言語において語の概念を深めたり、広げたりする仕事には、時代の、またその人のイデオロギーが確実に忍び込んでくる。それが言語なのである。その点を考えると、OED のような辞典が何段階もの抽象化の作業の産物であることの意味をしっかりと把握してかからねばならないのである。

6. 「art = 美術・芸術」への流れ

前章において、18世紀における諸概念の関連を揺るがせる動きを明らかにした。

本章では、art の現在における最も一般的な意味である「art = 美術・芸術」の展開をたどってみる。

まず、OED による説明を挙げよう。

「6. 「絵画」, 「版画」, 「彫刻」, 「建築」という模倣と構想の芸術への熟練の技の応用。原理、実践、作品におけるそれらの芸術の洗練育成。視覚的形態における美しいものの巧みな産出。」
1668年初出 [原文は既出]

「美術・芸術」という意味は、17世紀半ばから見られるわけである。

「art = 美術・芸術」への流れを全面的に辿ることは到底できないので、二、三のことに絞って述べてみる。

近代においてヨーロッパ各地にさまざまなアカデミーが設立されたことはよく知られている。それらのうち art, fine arts が名称に含まれるものを中心に調べてみよう。

(1) 美術「アカデミー」「協会」の成立と名称

アカデミーの成立は、イタリアが早い。

1573 : Accademia de Belle Arti (at Perugia)

1652 : Accadmeia Albertina de Belle Arti (at Turin)

フランスでは、

1648 : Académie Royale de Peinture et de Sculpture これは、革命後再編され、

1795 : Académie des Beaux-Arts

アメリカ大陸で早いのは、

1816 : Academia das Belas Artes in Rio de Janeiro

イギリスでの美術関係を中心にした「協会」「アカデミー」の歩みを簡単に見ることにしよう。

- 1731 : Dublin society for improving husbandry, manufactures and the useful *arts* and sciences 「家政、製造と有益な技能と科学向上のためのダブリン協会」
- 1753 : Foulis academy, Galsgow 「ファウルズ・アカデミー」(技能・美術学校を開いた)
- 1754 : Society of *Arts* for the Encouragement of *Arts*, Manufactures, and Commerce in Great Britain (後に Royal となる) 「大ブリテンにおける技能、製造と商業奨励のための技能協会」
- 1755 : Edinburgh Society for the Encouragement of *Arts*, Sciences, Manufactures, and Agriculture (通称 セレクト協会)
- 1760 : Society of *Artists* of Great Britain 「大ブリテンの美術家協会」('65 勅許状を受ける, '91まで存続)
- 1768 : Royal Academy of *Arts* in London 「王立美術アカデミー」
- 1804 : Society of *Painters* in Water Colours (後に Royal となる)
- 1823 : Society of British *Artists* (後に Royal となる, 「大ブリテンの美術家協会」の復活)
- 1823 : Royal Academy of *Arts* in Ireland 「アイルランド王立美術アカデミー」
- 1826 : Royal Academy of *Arts* in Scotland 「スコットランド王立美術アカデミー」
- 1880 : Royal Society of *Painter-Etchers and Engravers* (エッチング, 彫版)
- 1883 : Royal Institute of Oil *Painters* (油絵)
- 1891 : Royal Society of Portrait *Painters* (肖像画)
- 1904 : Royal Society of British *Sculptors* (彫刻)

一つの指標として「王立」のものを主として挙げたが、他に多くの協会があったし、今も存在する。

上のことからイギリスについては、次の様に言っても良いだろう。

①1750年代までは、art はまだ、manufacture や commerce と並べられている。「美術」と共に、あるいは「美術」以上に広く「技能」として捉えられている。②1760年代から、art, artist は、「美術」「美術家」への傾斜を強めているように見える。③19世紀の後半からは、美術の中の個別の分野の諸協会が成立しはじめる。④イタリア、フランスでの様に fine arts と呼称しないのはなぜか、一つの問題である。

一言断っておかねばならないことがある。ここでは、「美術・芸術」とまとめているが、厳密には正しくないということである。まず「美術」であり、それより拡張された意味において初めて、音楽と共に文学も含められるが、その際にも詩、雄弁まで含められるだけで、散文による作品・小説にまで拡大されるのは、更に遅れる。その理由や経過には、立ち入らない。art が芸術一般に拡大されるのは、美術という意味が確立・拡大したことの延長線上で起こったこととして間違いないので、「美術・芸術」という大雑把な表し方をとったということである。

(2) fine arts という表現

単に art (s) ではなく、fine art (s) という表現がある。

fine art [arts] 美術 <主に絵画・彫刻・建築> (『ジーニアス英和辞典』)

OED によると、英語における初出は、1767年である。

Fine art. [本来は、フランス語 *beaux-arts* の翻訳として複数。FINE a. III を参照.]

1. (複数で)、「美しいもの」に関わる、あるいは審美の能力に訴える芸術。最も広い意味では、詩、雄弁、音楽等を含むが、より狭い意味で、絵画、彫刻、建築のような構想の芸術に適用されることが多い。そこから、(単数)で、それらの芸術の一つ。また(比喩的に)「美術」の実践において要求されるものに比べられる洗練され微妙な腕前を要求する技能や仕事。

In *plural*, the arts which are concerned with 'the beautiful', or which appeal to the faculty of taste; in the widest use including poetry, eloquence, music, etc., but often applied in a more restricted sense to the arts of design, as painting, sculpture, and architecture. Hence in *sing.* one of these arts; also *transf.* an art or employment requiring refined and subtle skill comparable to that required in the practice of 'the fine arts'.

最初の語源欄の説明にあるように、この表現は「本来は、フランス語 *beaux-arts* の翻訳」であったが、フランス語も恐らくは、イタリア語から借用したものだだろう。(上の「アカデミー」「協会」の名称を参照)。イタリア語、フランス語では、広く「技能・技術」を意味した art の中で、「良い、優れた、洗練された」art を特に明示するには、修飾語 *bello*, *beau* が要求されたが、その表現が英国に届く頃には、英国ではその必要を感じさせない程まで、art と「美術」の結びつきが強くなっていて、ということであろう。

(3) ジョン・ラスキン John Ruskin [1819-1900] の用例

19世紀半ばの art の用例として、一つだけ紹介することにしよう。何の限定もなく使われている art が「美術(あるいは芸術)」の意味であることが示されれば、それで十分だろう。

「というのは(そして、そのことを私は今は特に主張したいのだが)、私が art の第一の目的と述べたもの、つまり事実の表示に到達することは、第二の目的である思想の表示に到達しないでも、可能であるけれども、しかし、前以て第一のものに到達していなければ、第二のものに到達することは全く不可能だからである。私は、人間が思想のための誤った基礎と素材を持っているときには、考えることが出来ないと言うのではない。そうではなくて、誤った思想は、思想の欠如よりも悪く、従って art ではない、と言うのである。そして、そういう理由で、私は第二のものがすべて art の真実の正に重要な目的であると考えられるけれども、事実の表示を第一の目的と呼ぶのである。なぜなら、それが、前者にとって必要であり、それ以前に達成されていなければならないからである。事実の表示がすべての art の基盤である。」

(『近代画家論』第1章)

For (and this is what I wish at present especially to insist upon) although it is possible to reach what I have stated to be the first end of art, the representation of facts, without reaching the second, the representation of thoughts, yet it is altogether impossible to reach the second without having previously reached the first. I do not say that a man cannot think, having false basis and material for thought ; but that a false thought is worse than the want of thought, and therefore is not art. And this is the reason why, though I consider the second as the real and only important end of all art, I call the representation of facts the first end ; because it is necessary to the other, and must be attained before it. It is the foundation of all art. (*Modern Painters*, Chapt. 1) [強調は、引用者]

(以下次号)

新刊紹介

チャールズ・カイトリー著、渋谷 勉訳

『イギリス祭事・民俗事典』

民間伝承 (Folk-Lore) という言葉一字義的には「民間の知識」(The Learning of the people) —は「民間の旧風」(popular antiquities) という早い頃の用語に代えて、1846年、故 w. j. トムス氏の作ったものである。……この一文は日本の民俗研究者に大きな影響を与えた、C. S. バーン女史の『民俗学概論』(1914、岡正雄訳1927、岡書院刊)の冒頭の一説である。この書は1890年英国民俗学協会より公刊されたL. ゴンム卿の『The Handbook of Folklore』を新增訂し、同じ書名で出版したものである。訳書の端書にある岡の「私は民俗学の成立は否定しても、文化諸科学の方法としてのフォークロリズム(Folklorism)は高らかに主張したいのである」という議論の当否は別としても、フォークロアの話が一世紀以上の歴史を持つことに新たな感慨を持つ。また、岡の編集方針が色濃く出ている『日本民俗学体系』が刊行された1960年初頭では日本民俗学は不十分とはいえ広く世界の学会動向に目を配っていたのである。それに比べると、都市伝説研究を中心としたアメリカ民俗学、“フォークロリズム”など現代科学としての理論を積極的に打ち出しているドイツ民俗学などの紹介が個別的には見られるものの、各国の民俗学の動向を体系的に参照する視点は後退

したといってよい現状である。日本の民俗学はそれ程に発展したのであるだろうか、単なる自閉症なのか。さて、ヨーロッパの基層文化の源流の一つであるケルト族の民俗研究書がヨーロッパの統合に関係するの各国の内外で出版されている例のように、ヨーロッパの民俗研究も新展開を見せている。その中で、イギリスの中世生活史の専門家、チャールズ・カイトリー氏の『The Customs and Ceremonie of Britain, an Encyclopedia of Living Traditions (Thames and Hudson, London, 1986)』は事典と銘打ちながら、祭事を中心とした恰好のイギリスの民俗紹介書となっている。160枚を越える写真、100曲近い民謡が理解を助けながら、キリスト協会の祭、民俗芸能、慈善事業、王室行事、各種スポーツ行事が209項目に整理され解説される。記述が生き生きしているのは祭事がいずれも“生者に対する死者の手”としてでなく、自ら変化し続ける“生物体”、すなわち現存する慣習だけが収録されているからである。この期にはキャサリン・ブリッグス編著『妖精事典』(1992、富山房)も翻訳出版されており、併読は相乗の読書効果を上げることになるだろう。

(佐野 賢治)

1992.10刊 A5判453頁 大修館書房 5665円